

本報告書の要約

第1章 毎日の子育て生活

① 現在の子育ての気がかり

現在の子育ての気がかりは9学年共通して、「整理整頓・片づけ」が第1位であった。「整理整頓・片づけ」は小学生平均が61.3%、中学生平均56.7%と最も高い数値であるが、中学生になると、生活習慣の自立が十分なされないままに、母親の関心は、子どもの進路、成績や宿題などへ移行していく様子があらわれていた。また、男女差があった項目では、小学生の男子は「食事のしつけ」、女子は「友だちとのかかわり方」を気にする母親が多く、中学生男子には目に見える学習力を期待し、女子へは受験対策が高まっていた(図1-1、2、表1-1、2)。

② 現在の一番の気がかり

小学生の母親の最大関心事は、①「友だちとのかかわり方」8.6%、②「ほめ方・しかり方」7.6%、③「子どもの性格、現在の態度や様子」6.6%で、中学生は、①「子どもの進路」13.0%、②「受験準備」8.2%、③「友だちとのかかわり方」5.5%であったが、とくに、学力関係の項目が低学年化し関心が高まっていたのが特徴である。小学生では親子ともに対人関係が現在の一番の悩みであり、母親自身の育児不安も多くあらわれていた。中学生で男女差がみられた項目としては、男子は「家庭学習の習慣」、女子は「整理整頓・片づけ」を気にする母親が多かった(図1-3、表1-3、4)。

③ しつけ・教育の情報源

しつけ・教育の情報源は、小学生の母親では身近で相談できる「自分の親」や「配偶者」など“ファミリー志向”の傾向がみられ、さらに、近所の友人、子どもの友だちの親、学生時代、職場や趣味などさまざまな場で出会う母親などの「準拠するコミュニティ」での友人たちからの情報も参考にしていた。中学生の母親では、「新聞」や「テレビ・ラジオ」などのマスコミ情報を参考にしたり、「配偶者」「学校の先生」をしつけや教育の相談相手にする割合が上昇していた(図1-5、6)。

④ 参考にするしつけ・教育の情報源

多くの情報源のなかから、とくに参考にしている情報源は、①「近所の友人・知人」41.1%、②「配偶者」35.7%、③「自分の親」30.0%、④「近所ではない友人・知人」23.5%、⑤「学校の先生」22.9%であった。また、小学生・中学生それぞれの母親は、現在の子育ての最大関心事によって、たとえば、日常の「しつけの仕方」が関心事の母親は「近所の友人・知人」を、「学校の宿題や予習・復習」「受験準備」「子どもの進路」が一番の気がかりな母親は、「学校の先生」を参考情報源として選ぶなど、独自の確かな情報源選定をしていた(図1-8)。

⑤ 日ごろの生活習慣

日ごろの生活習慣の自立度は全般的に低く、「完全に一人でできる」割合は20%前後の項目が多かった。「遊んだあとの片づけや部屋の整理整頓」は小学生で8人に1人、中学生で5人に1人が「完全に一人でできる」割合であった。「もう少しきちんとやってほしいこと」には、母親のジェンダー意識があらわれていた。また、学年が上がるにつれて、「計画的に勉強すること」と「家事の手伝い」への要望が高く、他と比較して自立度が高い子どもの母親でも「計画的に勉強すること」と「遊んだあとの片づけや部屋の整理整頓」は3人に1人がさらなる要望をしていた(図1-10、12、15)。

⑥ 現在の生活の満足度

現在の生活の満足度(「とても満足している」+「まあ満足している」)は、「親としての生活」が80.7%、次に「一人の人間として総合すると」69.1%、「妻としての生活」67.2%で、「社会人としての生活」は60.7%で最も低かった。さらに、就業状況別にみると、「専業主婦」は、「親としての生活」と「妻としての生活」の自己評価が他に比べて高く、「常勤」は、「社会人としての生活」と「一人の人間として総合すると」が最も高かった。「パートやフリー」は、「親としての生活」は「専業主婦」に近い数値で、「一人の人間として総合すると」は「常勤」に近い数値を示しており、「妻としての生活」と「社会人としての生活」は、「専業主婦」と「常勤」の中間に位置づけられる自己評定をしていた(図1-18)。

第2章 子どものしつけ・教育観

① 子育ての場面

子どもと一緒に行動したり、話を交わしたりするさまざまな子育て場面を日常生活のなかでどのくらい体験しているのか、何を感じているのかをたずねた。小学校低学年の子どもとはその日のできごとや友だち・先生の話をすることが多いが、大きくなるにつれて話題の中心は勉強や将来のことに変わっていき、一緒に出かけることも少なくなっていく。1998年調査と比べると、「子どもが成長したと感じる」ことが減少するなど、子育てに対する満足感にややかげりがみえている(図2-2、3、5)。

② 子育てで心がけていること

各家庭には子育てに際してとくに心がけていることがある。母親が最も心がけていることは今回も、「あいさつやお礼ができるようにしつけている」「友だちづきあいは大切にできるように教えている」などのいわば人間関係を大切にすることしつけであった。新たにつけ加えた「自分でできることは自分でさせるようにしつけている」という自立のしつけも第3位に入った(図2-6)。

③ 家庭の教育方針

「子どもがどういう友だちとつきあっているかを知るようにしている」が最も多く、他者との関係についての関心が高いことが示された。1998年調査と比較すると「子ど

もの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」が多く、他方、「子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある」や「親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている」が増え、子どもに関与しようとする方針が強まっている(図2-10、12)。

④ 休日の過ごし方

完全学校週5日制に移行して約半年の時点が今回の調査実施時期であった。増えた休日子どもたちはどう過ごしているのか、母親が望む過ごし方は何なのかをみると、両者にはかなりの違いがみられた。現状では「テレビやビデオを観る」「テレビゲームで遊ぶ」過ごし方は第4位、5位にあるが、母親の希望では第16位、18位(「その他」を除いて最下位)であった。母親の希望は家族と一緒に、また友だちとも遊ぶ、健康的で充実した過ごし方であり、そこには家庭のしつけ・教育観が垣間みえる(図2-14、16)。

第3章 子どもの学力・習い事・進路

① 学力観・勉強観

「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」などの「ほどほどで満足」的な学力観・勉強観が根強く残っている。しかし、子どもに高等教育(短期大学・四年制大学・大学院)への進学を期待する母親の間では、そうした教育観は減少する傾向にある。子どもの性別には、女子に対する学力観・勉強観のほうが「ほどほどで満足」的な傾向がある。また、高学歴の母親は非高学歴の母親よりも、また、成績上位者の母親は成績下位者の母親よりも、「ほどほどで満足」的な意識が弱く、反対に学力・成績を重視する志向が強い(図3-1、表3-1、2、3、4)。

② 進学期待

子どもへの進学期待では、「四年制大学まで」を希望する者が5割に達し、これに「短期大学まで」と「大学院まで」を加えると合計6割が短期大学以上を希望している。進学期待は性差が大きく、四年制大学+大学院への進学期待は男子が67.3%に対して女子は42.9%でしかない。また、地域差も大きく、郡部では進学期待が低い。保護者学歴や職業といった家庭的背景による進学期待の差も大きい。

このように、進学期待は性差、地域差、家庭的背景の差が大きいため、自己責任や規制緩和の論理で教育を家庭にまかせすぎるとは、子どもが学習を受ける権利や平等性を損なう危険がある(表3-5、6)。

③ 中学受験

16.1%が中学受験を予定し、20.4%が検討中である。これらを合わせると36.5%が中学受験について考えている。小5、6生では中学受験の予定は地方都市が4.9%、郡部が4.5%であるのに対して首都圏では19.5%と地域差が大きい(表3-8、9)。

④ 塾や習い事の経験率

塾や習い事の経験率は、首都圏で93.5%、地方都市で91.3%、郡部では79.6%。首都圏では「スイミングスクール」(59.9%)、「定期的に教材が届く通信教育」(53.6%)の2つの経験率が50%を超えている。また、首都圏では4割の子どもが塾や習い事を5個以上経験している(表3-12、13、14)。

⑤ 現在通っている塾や習い事

塾や習い事の現在利用率(調査時点での利用率)は首都圏で77.0%、地方都市81.3%、郡部は65.4%であった。内容別には、「定期的に教材が届く通信教育」(21.9%)が最も多く、この他、「受験のための塾」(15.9%)、「補習塾」(10.0%)の利用率が高く、これらを合計すると47.8%であった(表3-16)。

⑥ 習わせてよかった塾や習い事とその理由

最も習わせてよかったと思う塾や習い事をたずねたところ、「スポーツ系」が選ばれる傾向が強く、合計で33.9%を占めている。そして、よかった理由としては達成・上達・自信・健康などがあげられている(表3-17、20)。

⑦ 教育費

塾や習い事への教育費は、24.6%の家庭が「2万円以上4万円未満」、8.3%の家庭が「4万円以上」を支出している。塾や習い事にかかる費用は高額になっている。小6生の受験予定のある家庭では、およそ7割が「4万円以上」の教育費を支出しており、「6万円以上」の家庭も35.0%あった(表3-21、24)。

第4章 「子どもの学習」へのかかわり

① 子どもの学習の様子

学校以外での総学習時間は学年が進むと増加していくが、家庭での学習日数は減少する。この現象は、中学生で顕著であり、家庭での学習に代わって、塾などでの学習が増加していくためだと考えられる。ただし、中2生では、個人差も大きくなり、受験に関する意識の差が総学習時間数に反映してくるようだ。また、母親は子どもの学業成績を過大評価する傾向がある。さらに、小4生以降では母親がよい成績をとっていると考えている子どもは、学習時間が長い傾向がある(図4-1、2、3、4)。

② 子どもの学習に関してすること

母親は子どもの受験に対する関心は高いが、教養を身につけることへの関心は低い。関心の高さは、子どもに学習の手伝いをしたいと思う気持ちにあらわれている。学習内容が高度でない小学校低学年では、手伝うこともしているが、学年とともに高度になるにつれて手伝うことができず、「勉強しなさい」と声をかけたり、成績をチェックするだけになっていく。チェックといってもテストの点数(成績)だけで、学習内容のチェックまでは行わなくなっていく(図4-5)。

③ 学校の取り組みや指導の満足度

子どもの学力をつける指導に関しては、必ずしも満足ばかりでない。しかし、学習への態度や姿勢の指導には満足している。受験に直結しない課外活動や心身の健康、人格形成にかかわることへの満足度は高い。良好な友人関係への指導は小学校高学年では不満も多く、高学年のいじめへの対応が必ずしも十分でないことを示唆している。子どもの将来に関係する技能習得には、満足とともに不満も大きい(図4-6)。

第5章 子育ての地域差

① 日常生活のなかでの親子のコミュニケーション

首都圏では「子どもと『友だちや先生について』話をする」「一日のできごとを聞く」など、親子の会話が密な傾向がある。一方、「子どもと一緒に出かける」「家族みんなで食事をする」など、親子が一緒に行動する場面は郡部、地方都市で多い(図5-1)。

② 悩み・気がかり

学習・進学に関する悩み・気がかりは首都圏で高く、地方都市、郡部で低い。子どもとの接し方についての悩みは地方都市で高い。郡部では人間関係について悩みをもつ母親が多い(図5-2)。

③ 学力観・勉強観

郡部では学校生活の楽しさや資格取得を重視する傾向がみられる。首都圏では進学に対する意識が高く、また英語力への関心が高い(図5-3)。

④ 家庭環境

首都圏では子ども、保護者ともに、家庭におけるパソコンの利用率が高い。また、首都圏、地方都市では家に本がたくさんあり、知的環境に恵まれている。自分専用のテレビ、携帯電話やPHSを持つ子どもが多いのも首都圏の特徴である(図5-4)。

第6章 子どもの学年による子育ての違い

① 小学1年生

小1生の母親は、子どもとのかかわりが密接である。子どもとよく話し、一緒に行動することも多い。生活習慣がまだ十分身につけていないので、しつけにも気を配っているが、その分「しつけの仕方」についての悩みも抱えている。学習面の心配は、まだ少ない。

② 小学2年生

小2生は自分一人でできることが増え、自立が始まるとともに、少しずつ母親の手

を離れていく。気がかりでは、「翌日の学校の用意や準備」「学校生活の様子」など学校生活にかかわる項目を選択する母親が相対的に多い。学習面での不安はまだ小さいが、学校に対して基礎学力の重視を望むニーズが強まる。

③ 小学3年生

生活習慣で一人でできることは一層増えるものの、小3生ごろから母親の要求水準も高くなってくる。とくに、整理整頓や規律正しさなどを求める傾向が強まる。学習面でも、自分で「計画的に勉強すること」をきちんとやってほしいと回答する母親が4割を超える。

④ 小学4年生

小4生の母親は、他の学年の母親に比べるととりたてて高い数値を示す悩みや気がかりもなく、子どもの様子を見て不安になることも少ない。比較的、親子関係が安定している時期のようにみえる。そのようななかで、一部であるが、中学受験を気にする母親が出始める。

⑤ 小学5年生

一緒に行動する機会は減るが、将来や進路について話すことが増えるなど、会話の中味が変化してくる。「自分でできるはずなのに…」と思うためか、起床・就寝時間や歯磨きなど基本的な生活習慣についての気がかりが増えるのが、小5生の母親の特徴である。

⑥ 小学6年生

中学受験をさせるつもり約2割の母親にとって、受験を乗り越えることが大きな課題になっているようだ。悩み・気がかりでは、進路や受験、教育費などを選択する割合が増加する。それ以外では、学校に対する満足度の低下が、傾向として目立つ。

⑦ 中学1年生

家庭学習や学校での学習に関する気がかりが増えるのが、中1生の母親の特徴である。受験を強く意識した悩みではないが、自分で計画的に学習してほしいという意識が強まる。学習内容にまでかかわることは少なくなるが、テストの点数などは気にしている。

⑧ 中学2年生

高校受験を少しずつリアリティのある課題として意識し始めるのが、中2生の母親の特徴である。学習面での気がかりが増える。親離れが進むことや子どもが部活動で忙しいため、会話の機会は少なく、成長の実感はつかみづらいが、しつけや生活習慣についての気がかりは減少する。

⑨ 中学3年生

中3生になると生活面での自立が進むので、生活習慣やしつけに関する悩みは全年のなかで最も低くなる。それに代わって、進路や進学面での気がかりが増大する。子どもの高校受験が、母親にとっても大きな課題であることが分かる。